

Built-in Ability (既に組み込まれた能力)

加藤マンヤ

簡易プール、プリズム、グラス、メダカ、水、自然光

120×120×40cm

2016年

今回の作品構想は、渡辺英治先生（基礎生物学研究所）の脳研究に刺激を受けたことを出発点としている。メダカの視覚特性と脳に関する研究を私が説明するのも憚られるので割愛するが、最も刺激を受けたのは「メダカには、人間が見えない色が見えているんです」という渡辺先生の一言だった。

我々はこの情報化社会において、コントローラブル（制御可能）な世界に生きていると無意識のうちに思い込んでいるのと同時に、我々が認知している世界の様相に疑いを差し込む感覚が希薄になっているように思う。そして、制御不能な大災害や大事件が起きるたびに、自分たちの能力の限界と、そこに横たわる微動だにしない現実を突きつけられているような気さえしていた。

我々が認知している（できている）世界など「真実（というものがあつたら）」のほんの一部にすぎず、百面相のひとつかふたつの顔しか見えていない（見ることができない）と考える方が自然なのではないのだろうか。いや、そもそも「これこそが真実である」という普遍性すら怪しいと言わざるをえない。

私はこの作品によって「何も起きていないかのような眼前の状況の別階層に、私たちが当然すくい取ることができない『異なる枠組みや構造を持った踏み入れることさえできない世界』が確固として存在しているということ」を示したいと思った。そしてそのための最善の方法が「そこには奇異な状況はなにもない（ありふれた日常があるのみ）」という禅問答のような方法であると考えた。コンセプトに関わる要素のみを配置し、それでもなおパラレルな構造が立ち現れる仕組みこそ、まさにこの世界の在り方なのだと考えている。